

2025年12月の地震活動の評価（案）

1. 主な地震活動

- 12月8日に青森県東方沖でマグニチュード (M) 7.5 の地震が発生し、岩手県の久慈港で 0.7m、北海道の浦河で 0.5m（いずれも速報値）の津波を観測した。この地震により、青森県で最大震度 6 強を観測し、負傷者が出るなどの被害を生じた。また、青森県三八上北で長周期地震動階級 3 を観測した。

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

- 12月2日に釧路沖（※1）の深さ約 45km で M5.2 の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。
- 12月20日に根室半島南東沖の深さ約 15km で M5.4 の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。

(2) 東北地方

- 12月8日に青森県東方沖の深さ約 55km で M7.5 の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

G N S S 観測によると、今回の地震に伴って、青森県下北郡東通（ひがしどおり）村の東通 2 観測点では、東方向に約 9 cm の変動及び約 2 cm の沈降が検出されるなど、青森県を中心に地殻変動が観測された。また、「だいち 2 号」及び「だいち 4 号」の合成開口レーダー干渉解析結果でも、青森県東部で G N S S 観測結果と同程度の地殻変動が検出された。また、G N S S 観測によると、M7.5 の地震の後、およそ 1 か月間で、東通 2 観測点で東方向に約 2 cm 変動するなど、青森県東部を中心に余効変動と考えられる水平変動が観測されている。なお、この変動には 12 月 12 日に発生した M6.9 の地震に伴う変動も含まれている。

12 月 12 日には、M7.5 の地震の震央から東方向に約 50km 程度の場所で、M6.9 の地震が発生するなど地震活動が一時的に活発になった。M7.5 の地震発生直後と比べ、地震回数は減少してきているものの、12 月 31 日までに最大震度 1 以上を観測した地震が 50 回発生するなど、地震活動は継続している。地震活動域は、M7.5 の地震の震央からおおよそ東方向に 100km 程度広がっている。さらに、M7.5 の地震の発生以降、地震活動域よりも東の領域で浅部超低周波地震及び微動が発生している。

12 日に発生した M6.9 の地震は、同規模の地震が続けて発生しやすい領域（続発領域）内で発生している。過去の事例では、続発領域内で大きな地震が発生した場合は、規模の近い地震や、より規模の大きな地震が続発しやすい傾向がある。

- 12月31日に岩手県沖の深さ約 30km で M6.1 の地震が発生した。この地震の発

震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、太平洋プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。

(3) 関東・中部地方

- 12月12日に茨城県南部の深さ約50kmでM4.9の地震が発生した。この地震の発震機構は北西－南東方向に圧力軸を持つ逆断層型で、フィリピン海プレートと陸のプレートの境界で発生した地震である。
- 12月14日に石川県西方沖（※2）の深さ約10kmでM4.9の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。この地震は2024年1月1日に石川県能登地方で発生したM7.6の地震の活動域の中で発生した地震である。

(4) 近畿・中国・四国地方

目立った活動はなかった。

(5) 九州・沖縄地方

- 12月30日に奄美大島近海の深さ約20kmでM5.7の地震が発生した。この地震の発震機構は北北東－南南西方向に張力軸を持つ正断層型で、陸のプレート内で発生した地震である。

(6) 南海トラフ周辺

- 南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていない。

(7) その他の地域

- 12月28日に台湾付近の深さ約90kmでM7.0の地震が発生した。この地震の発震機構は北東－南西方向に張力軸を持つ型で、フィリピン海プレート内部で発生した地震である。

今回の地震は、地震調査委員会が「日向灘及び南西諸島海溝周辺の地震活動の長期評価（第二版）（令和4年3月25日公表）」の「南西諸島北西沖の沈み込んだプレート内のやや深い地震の発生領域」で発生している。なお、長期評価では、この領域はM7.0～7.5程度の地震が30年以内に発生する確率はⅢランク（*）で、海溝型地震の中では発生する確率が高いグループに分類されている。

補足（2026年1月1日以降の地震活動）

- 1月6日10時18分に島根県東部の深さ約10kmでM6.4の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ横ずれ断層型で、地殻内で発生した地震である。

G N S S観測によると、この地震に伴い、わずかな地殻変動が観測された。

今回の地震の震央付近では、5日からM3.3の地震などの微小地震活動が見られた。また、M6.4の地震発生後の6日10時28分にM5.1、10時37分にM5.5の地震が発生するなど、M5.0を超える地震が発生したほか、1月6日から12日までに震度1以上を観測した地震が51回発生するなど、東西10kmにわたって地

震活動が活発な状態が継続している。

今回の地震は、地震調査委員会の「中国地域の活断層の長期評価（第一版）」の北部区域内で発生した。この区域は、活断層は少ないが、地震活動は比較的活発な地域として評価している。

今回の地震の周辺では、1989 年 10 月に鳥取県西部で発生した M5.3 の地震の 6 日後に M5.5 の地震が発生した。また、1990 年 11 月に鳥取県西部で発生した M5.1 の地震の 1 分後に M4.8 の地震が、2 日後に M5.2 の地震が、10 日後に M5.1 の地震が発生するなど続発した事例がある。

※：海溝型地震における今後 30 年以内の地震発生確率が 26%以上を「Ⅲランク」、3%～ 26%未満を「Ⅱランク」、3%未満を「Ⅰランク」、不明（過去の地震データが少ないため、確率の評価が困難）を「X ランク」と表記している。

※1：気象庁が情報発表に用いた震央地名は「根室半島南東沖」である。

※2：気象庁が情報発表に用いた震央地名は「能登半島沖」である。

注：GNSSとは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。

2025年12月の地震活動の評価についての補足説明

令和8年1月14日
地震調査委員会

1. 主な地震活動について

2025年12月の日本及びその周辺域におけるマグニチュード(M)別の地震の発生状況は以下のとおり。

M4.0以上及びM5.0以上の地震の発生は、それぞれ170回(11月は149回)及び28回(11月は35回)であった。また、M6.0以上の地震の発生は6回(11月は4回)であった。

なお、上記の月回数のうち、青森県東方沖で発生した地震は、M4.0以上、M5.0以上、M6.0以上のそれぞれについて、53回、13回、5回であった。また、台湾付近で発生した地震は、それぞれ13回、3回、1回であった。

- (参考) M4.0以上の月回数81回(69-104回)
(1998-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)
M5.0以上の月回数10回(7-14回)
(1973-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)
M6.0以上の月回数1回(0-2回)
(1919-2017年の月回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)
M6.0以上の年回数16回(12-21回)
(1919-2017年の年回数の中央値、括弧の値は半数が入る範囲)

2024年12月以降2025年11月末までの間、主な地震活動として評価文に取り上げたものは次のものがあつた。

— 日向灘	2025年1月13日	M6.6(深さ約35km)
— 福島県会津	2025年1月23日	M5.2(深さ約5km)
— 長野県北部	2025年4月18日	M5.1(深さ約15km)
— トカラ列島近海	2025年6月30日	M5.3
— トカラ列島近海	2025年7月2日	M5.1
— トカラ列島近海	2025年7月2日	M5.6
— トカラ列島近海	2025年7月3日	M5.5(深さ約10km)
— トカラ列島近海	2025年7月5日	M5.4
— トカラ列島近海	2025年7月6日	M4.9
— トカラ列島近海	2025年7月6日	M5.5
— トカラ列島近海	2025年7月7日	M5.1
— ロシア、カムチャツカ半島東方沖	2025年7月30日	M8.8
— トカラ列島近海	2025年9月17日	M4.7
— 根室半島南東沖	2025年10月25日	M5.8(深さ約40km)
— 三陸沖	2025年11月9日	M6.9(深さ約15km)
— 熊本県阿蘇地方	2025年11月25日	M5.8(深さ約10km)

2. 各領域別の地震活動

(1) 北海道地方

北海道地方では特に補足する事項はない。

(2) 東北地方

東北地方では特に補足する事項はない。

(3) 関東・中部地方

ー G N S S 観測によると、2022 年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されている。これは、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのフィリピン海プレートと陸のプレートの境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと考えられる。すべりの中心は渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動している。

ー 「12 月 14 日に石川県西方沖の深さ約 10km で M4.9 の地震が発生した。この地震の発震機構は西北西－東南東方向に圧力軸を持つ逆断層型であった。この地震は 2024 年 1 月 1 日に石川県能登地方で発生した M7.6 の地震の活動域の中で発生した地震である。」：

2020 年 12 月以降の一連の地震活動については、『「令和 6 年能登半島地震」の最近の地震活動（令和 8 年 1 月 14 日公表）』を参照。

(4) 近畿・中国・四国地方

近畿・中国・四国地方では特に補足する事項はない。

(5) 九州・沖縄地方

ー G N S S 観測によると、2024 年 8 月 8 日と 2025 年 1 月 13 日の日向灘の地震発生後のゆっくりとした変動は、これらの地震に伴う余効変動と考えられるが、その大きさはかなり小さくなっている。

ー 6 月 21 日からトカラ列島近海（小宝島付近）で地震活動が活発となり、7 月 3 日には M5.5 の地震が発生するなど、7 月 7 日までの間に最大震度 5 弱以上を観測した地震が 8 回発生した。その後、地震活動は 7 月 20 日頃から低下してきており、規模が大きな地震の回数も減少してきている。なお、12 月中に発生した最大規模の地震は 29 日に発生した M3.4 の地震であり、震度 1 以上を観測した地震は 10 回であった。これらの地震活動は陸のプレート内で発生した。

G N S S 観測によると、今回の一連の地震活動の活発化と共に、宝島や小宝島、悪石島で水平変動が観測されていたが、現在は鈍化している。

ー 7 月にトカラ列島近海（諏訪之瀬島付近）で地震活動が活発となり、12 月中に震度 1 以上を観測した地震が 10 回（震度 3：1 回、震度 2：2 回）発生した。このうち、最大規模の地震は 21 日に発生した M3.5 の地震である。

ー 11 月 25 日に熊本県阿蘇地方で M5.8 の地震が発生して以降、地震活動は減衰しつつも継続しており、12 月中に震度 1 以上を観測した地震は 14 回（震度 3：2 回、震度 2：5 回）発生した。このうち、最大規模の地震は 29 日に発生した M3.9 の地震である。

(6) 南海トラフ周辺

ー「南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まった

と考えられる特段の変化は観測されていない。」：

（なお、これは、1月9日に開催された定例の南海トラフ沿いの地震に関する評価検討会における見解（参考参照）と同様である。）

（参考）南海トラフ地震関連解説情報について－最近の南海トラフ周辺の地殻活動－（令和8年1月9日気象庁地震火山部）

「現在のところ、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時（注）と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。

（注）南海トラフ沿いの大規模地震（M8からM9クラス）は、「平常時」においても今後30年以内に発生する確率が高い（詳細は「南海トラフの地震活動の長期評価（第二版一部改訂）」参照）と評価されており、昭和東南海地震・昭和南海地震の発生から約80年が経過していることから切迫性の高い状態です。

1. 地震の観測状況

（顕著な地震活動に関する現象）

南海トラフ周辺では、特に目立った地震活動はありませんでした。

（ゆっくりすべりに関係する現象）

プレート境界付近を震源とする深部低周波地震（微動）のうち、主なものは以下のとおりです。

- （1）紀伊半島西部：11月30日から12月7日
- （2）四国西部：12月2日から12月13日
- （3）四国西部：12月31日から継続中

2. 地殻変動の観測状況

（ゆっくりすべりに関係する現象）

上記（1）から（3）の深部低周波地震（微動）とほぼ同期して、周辺に設置されている複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しています。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られています。また、深部低周波地震（微動）は観測されていませんが、以下のとおり、複数のひずみ計でわずかな地殻変動を観測しました。周辺の傾斜データでも、わずかな変化が見られました。

- （4）東海：12月12日から12月13日

GNS観測によると、2022年初頭から、静岡県西部から愛知県東部にかけて、それまでの傾向とは異なる地殻変動が観測されています。

（長期的な地殻変動）

GNS観測等によると、御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺では長期的な沈降傾向が継続しています。

3. 地殻活動の評価

（ゆっくりすべりに関係する現象）

上記（1）から（3）の深部低周波地震（微動）と地殻変動、及び上記（4）の地殻変動は、想定震源域のプレート境界深部において発生した短期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。

2022年初頭からの静岡県西部から愛知県東部にかけての地殻変動は、渥美半島周辺から浜名湖周辺にかけてのプレート境界深部における長期的ゆっくりすべりに起因するものと推定しています。この長期的ゆっくりすべりは、すべりの中心が渥美半島周辺から浜名湖周辺に移動しています。

これらの深部低周波地震（微動）、短期的ゆっくりすべり、及び長期的ゆっくりすべりは、

それぞれ、従来からも繰り返し観測されてきた現象です。

(長期的な地殻変動)

御前崎、潮岬及び室戸岬のそれぞれの周辺で見られる長期的な沈降傾向はフィリピン海プレート沈み込みに伴うもので、その傾向に大きな変化はありません。

上記観測結果を総合的に判断すると、南海トラフ地震の想定震源域ではプレート境界の固着状況に特段の変化を示すようなデータは得られておらず、南海トラフ沿いの大規模地震の発生の可能性が平常時と比べて相対的に高まったと考えられる特段の変化は観測されていません。」

- | | |
|------|--|
| 参考 1 | 「地震活動の評価」において掲載する地震活動の目安
①M6.0 以上または最大震度が 4 以上のもの。②内陸 M4.5 以上かつ最大震度が 3 以上のもの。
③海域 M5.0 以上かつ最大震度が 3 以上のもの。 |
| 参考 2 | 「地震活動の評価についての補足説明」の記述の目安
1 「地震活動の評価」に記述された地震活動に係わる参考事項。
2 「主な地震活動」として記述された地震活動（一年程度以内）に関連する活動。
3 評価作業をしたものの、活動が顕著でなく、かつ、通常の活動の範囲内であることから、
「地震活動の評価」に記述しなかった活動の状況。
4 一連で M6.0 以上が推定されたゆっくりすべりとそれに伴って発生した低周波地震(微動)。 |